

個が生きる社会科授業の評価

— 第5学年単元「これからの米づくり」をもとに —

吉 浦 公 子

1. 個が生きる社会科授業の評価とは

(1) 個が生きる社会科授業とは

個が生きる授業とは、児童自身が主体的に学習に取り組み、自分のよさを発揮し、より深まっていける授業であると考えられている。

この自分のよさを生かし、より確かな見方や考え方を培う上で、その基盤となっているのは、自ら学ぼうとする意欲であると考えられる。個が生きる授業づくりにあたっては、学習に対する児童の意欲を引き出し、その持続を図ることが必要である。その意欲に支えられて学習した成果を児童自身がふりかえることによって、自ら学び得たことへの満足感や、より深まりのある学習をめざしたいという意識をもち、その中から新たな学習意欲が生まれてくると考えている。授業づくりにあたっては、児童が「現在の自分自身を評価する力」を培うことを大切に、自ら学ぶ意欲・態度を身につけた子ども（自ら学ぶ子ども）を育てていきたいと考えている。以上のような考えをもとに、個が生きる社会科授業を次のように描いてみた。

「児童が意欲的に社会事象に取り組み、各々の見方や考え方に基づいて、自分なりの方法で追求し、より深い見方や考え方を児童自身が培っていくことのできる授業」

(2) 自己を高める評価力の育成にあたって

上記のような考えをもとに、自ら学ぶ意欲・態度を育成する授業づくりにあたって、ここでは自己を高める評価力の育成の面から考えていく。自己を高める評価力とは「現在の自分自身を正しくとらえ、自分のよさに気づいたり、修正しながら、自分自身をよりよく伸ばしていく力」ととらえている。この評価力は、個人の独断だけではなく、他者、つまり児童においては、友達や教師からの評価も取り込みながら、自分自身を伸ばしていく力である。

このような自己を高める評価力は、児童自ら自分自身を評価することのできる場面を学習の中に設定し、その繰り返しの中で育てていくことが大切であると考えている。この児童自ら自分自身を評価することのできる場面の設定は、児童自身が「自分の変容を学習の中でふりかえることのできる」ような単元構成や授業構成であることが前提となる。

したがって自己を高める評価力の育成をめざした授業づくりでは、特に課題に対する「自分自身の考え（予想）をもつ場」を重視したい。学習の中での自分の変容を自分自身でとらえていく上で、この課題に対する自分の考えを明らかにしておくことは大切である。次に追求過程においては「学習の深まりに自分自身で気付いたり、他者との関わりの中で気付くことのできる」展開を工夫していく。このような「自分の変容を学習の中でふりかえることのできる」ような授業づくりを工夫し、その上で「学習をふりかえる場」を適時適切に位置づけ、自分自身の考え方の変容をとらえたり、追求方法の検討をおこなうことができるようにする。

以上の考え方に基づいて、本実践の取り組みの重点を次のように設定した。

重点1

課題に対する予想をもつ場の重視

一人一人が課題に対して自分なりの考え（予想）をもつことのできる場を重視する。

重点2

学習をふりかえる場の重視

一人一人が学習の成果を自分の予想と比べることにより、自分自身の変容に気付くことのできる場を工夫する。

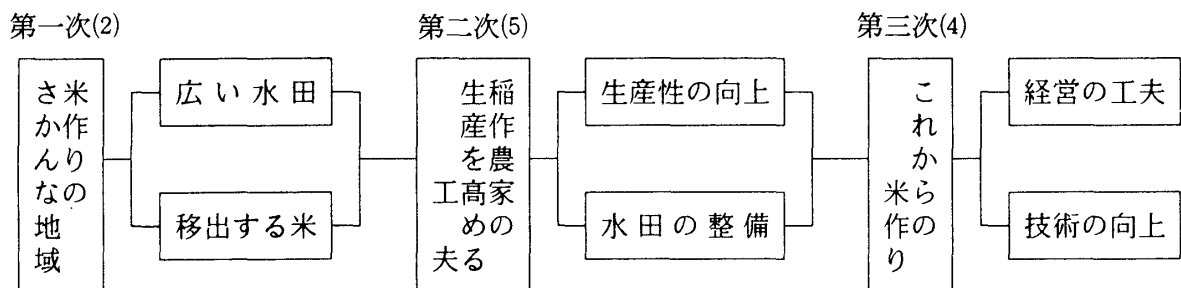
2. 自己を高める評価力の育成を目指した実践 第5学年小単元「これからの米づくり」

自己を高める評価力の育成を目指した実践として、ここでは単元「わが国の農業とわたしたちの暮らし」の小単元「これからの米づくり」（第三次）の第3・4時の実践を述べていく。

(1) 本小単元について

本小単元は、単元「わが国の農業とわたしたちの暮らし」の最後（第三次）の小単元である。

単元「わが国の農業とわたしたちの暮らし」の指導内容と計画



本小単元（第三次）において、第1・2時で、児童は稲作農家のかかえる問題に目を向けた。そしてこの現状において農家の人々はどうのような取り組みをしているか予想し、児童自身が自主的に調べる調査活動を行った。その調べてきた事実や資料を基にしながら、消費者との関わりで農業をとらえ始めている。そこで、第3・4時では、さらに新しい農業の方向を目指した営みの一つの姿として、熊本県富合町の農業を取り上げる。

熊本県富合町は、熊本平野のほぼ中央に位置する平坦な水田農業地帯である。町と農業協同組合での取り組みには、次のような特色がある。

ア コシヒカリ、キヌヒカリなどの「うまい米づくり」をすすめる。

イ 特定用途米「ホシユタカ」を導入し、銘柄産地づくりをすすめる。

ウ 冷凍米飯工場と連携し、ホシユタカの商品開発・販売までをおこなう。

このように、富合町の農業は、消費者の需要に応えるだけでなく、特別用途米を導入し、積極的に需要を創造する米づくりを目指している。

(2) 小単元のねらい

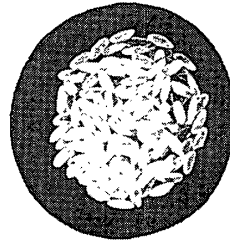
農家の人々は消費者の願いに応えるために様々な取り組みをしていることを理解させる。

(3) 展開の概略

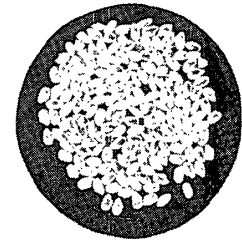
① 課題に対して自分の予想をもつ場

児童に富合町でつくられている2種類の米を提示する。(1はホシユタカ, 2はササニシキ) 一方の粒長の短い米については, 名称は分からないまでも, 平素自分たちが食べている米に近いものであることは, すぐにとらえた。それだけに, 日頃見慣れない他方の長粒種に対しては, 興味をもち, 形状の特色・味に対する疑問や思いなど, 児童からは自分

くらべてみよう



1



2

なりの気づきが出された。2種類の米の名称を知らせた後, 資料「富合町におけるホシユタカの作付面積の推移」をグラフで提示した。資料については, 次のような点について発言があり, 全員で確認した。

- ・ホシユタカの生産は平成元年度(試作)から始められた。
- ・ホシユタカの作付面積は, 平成元年度1ha(試作)から年毎に20ha, 40ha, 60haと増加している。
- ・平成5年度にはホシユタカの作付面積は, 100haが計画されている。

グラフにおいて, 作付面積の伸びが著しいことから, 「なぜ, ホシユタカを生産はこのように伸びたのだろうか。」という児童の疑問が出された。また, 一部の児童は, 長粒米はおいしくないという聞いた経験という別の側面から, 作付面積の伸びに疑問を抱いたようである。

そこで, 全員に「富合町で, ホシユタカを生産が増えているのは, どうしてでしょう。」と発問し, 児童に考え(予想)させてみた。児童の予想をもたせるために, 時間を十分とり, 必ずノートに記述するようにした。全員が自分なりの予想を記述した後, 全体の場でも話し合わせた。次は, その主なものである。

ア ササニシキのよりすぐれているから。

- ・土地に合っているから。
- ・ササニシキに比べて, 味も余り劣らない。
- ・ササニシキよりも, おいしいから。
- ・やすい値段で売ることができるから。
- ・病気や害虫に強く, 低農薬で栽培できるから。

イ ホシユタカの味の特色をいかに。

- ・最近外国の人が米飯を好み始めたために, 外国の人の好みに合わせて栽培するため。
- ・ホシユタカの特色を好む人々が増えてきたから。

ウ ササニシキと混ぜて売る。

- ・ササニシキと混ぜて, ササニシキだけよりも安く売するため。

資料1

予想
消費者は, 味がよく, ねだんが安い米を望んでいるので, ホシユタカは, たくさんとれて味もよいから生産が増えたのだろう。
予想(変更)
細長い米は, ばさばさして, おいしくないという聞いたことを思いだしたので, ホシユタカは, ササニシキのように味はよくないだろう。でも, 逆に, 外国の人はよろこぶから, 日本にいる外国の人むけにつくっているのだろう。

資料2

予想したこと
家の人から, 外国の米は, おいしくないという話を聞いたことがある。ホシユタカもたぶん, まずいと思う。なぜ, まずい米をつくるのだろうか。たぶん, ぼくたちが, 食べるためではない, 別のためにつくっているのだと思う。何のためかは, うかばない。

みんなの予想は食べるためというけど, おいしくないと思わないと思う。

児童が予想を発表し終えた段階で, 出された予想について相互に吟味しあうことにした。

予想アは, 前時までの学習において, 消費者の望む「味」「価格」「安全性」に目をむけたものであると思われる。そのなかで, 味については, ホシユタカが長粒種であることから, 特に予想イの児童から, 反対意見が出された。ホシユタカの味は, ササニシキのおいしさとは別のものではないかという意見である。また, 予想イに関しては, 一人一人の予想の段階では, 36名中12名であった

が、出し合って各々について吟味した後は、半数近くが予想イを支持している。またウは、米づくりについて販売の工夫の一つとして、ブレンド米について調べた児童の考えである。この考えに対しても、混ぜるとまずくなるのではないかという意見が、やはり予想イの児童から出された。

前ページの資料1の児童は、この話し合いの後、自分の予想を変更して、新たに自分なりの予想をたてていることがわかる。また、資料2の児童は、話し合いのなかでも、自分の考えは変わらず、話し合いの後に最後の2行を付け加えている。

② 自分の予想について一人一人が追求する場

「自分の予想にそって一人一人が追求する場」

①の段階で、各々出された予想を全員で吟味した後、もう一度自分の予想をもたせて、まず、一人一人が自分で調べる活動に入った。学習後に、自分自身の学習成果が分かるように、ノートの記述について、次の点を明記することを全員で確認した。

ア 自分の予想（①で変更した場合は、新たな予想を記述する。）

イ 調べた根拠となる資料

ウ 調べたことの記述（資料の羅列ではなく、自分なりのまとめ方で記述する。）

エ 調べた結果についての感想

本時では、根拠となる資料は、個人のこれまで収集した資料や、教室の資料コーナーのものが中心となった。本小単元に入る以前より、前小単元の内容に関する図書等は、すでにかなり児童と共に収集し、教室に自由に利用できる資料コーナーを設けている。また、本小単元開始後も、米づくりの農家の工夫について、児童個人やグループ等で調査し、収集したパンフレットや新聞の切抜きをファイルしたものもさらに加えられ、教室のコーナーに集められている。この収集した資料は、その都度児童相互が紹介し合っているため、どのような情報がどこにあるかは、ほとんどの児童が把握している。ここでは、様々な情報に対して、自分の予想を検証するために、どの様に活用し、読み取ったかを明記させた。これは、学習後、予想の検証と共に、友だちの資料の活用の仕方を知り、自分の調べ方をふりかえる場で生かそうと考えたものである。

「一人一人ですべて調べたことをもとに、全員で予想を検証する場」

集団で予想を確かめていく場合、一人一人ですべて調べた段階で得た資料や考え方を生かしていかななくては、児童の追求意欲や学習の深まりは期待できない。そこで、「自分の予想と比べてどうでしたか。」と発問し、児童の学習の成果を引き出してみた。児童は、

「予想したのと同じだった。」「少し違っていた。」と言いながら、自分で見つけた資料をもとにホシユタカの生産が増えた理由を発表しあった。発表では、児童一人一人が、自分なりに調べているため、関連した発表や補充する発言が続き、より深い事実のとらえをすることができた。

このような段階で、児童の学習成果をより確かなものにしていくために、ホシユタカの開発や富合町の取り組みについての資料で補足していった。本時は、中国農業試験場の坂田さんの話（資料C）や、富合町農業協同組合の方からの聞き取りを、児童が理解し易いように書き下ろしたものを資料とした。

資料C

坂井さんの話（中国農業試験場）

この「ホシユタカ」は、広島県の中国農業試験場で昭和62年に品種改良によってできました。外国の米（インディカ種の粒の長い米）と日本の米（中国55号）を合わせ、いままでも日本で作られた米とは違う品種の米ができました。

この米は、粘りけがなくさらさらしているので、普通のご飯としてそのまま食べるとおいしくありません。しかし、ピラフ、チャーハン、カレーなど外国の料理方法にすると、大変おいしく食べることができます。

また、外国の米の特徴を受け継いで、丈が長いが太くて倒れにくく、病気や虫に強いことや、穂にたくさん実るといった良い点があります。

米の消費量を高めるために、わたしたちは、「コシヒカリ」のような日本食としておいしい米とともに、このような特別の用途のための米の研究を進めているのです。

また、調理した白飯（ササニシキ）とピラフ（ホシユタカ）を提示し、各々を全員が実際に食べ比べて、自分たちが調べたことを確かめる活動をおこなった。

③ 自分の予想と比較して学習をふりかえる場

全員で予想を確かめ、富合町の取り組みを明らかにしたところで、学習でわかったことを、各自にまとめさせてみた。ここでは、学習してわかったことについて、自分の予想と比べて、思ったことを記述するように助言した。予想した段階と比べて、自分の変容つまり、自分がどう深まったかに目を向けさせようとしたためである。

児童は、自分が一人で調べた時に記述したノートを手がかりにして、学習をふりかえり、予想と比べながら、自分の感想をまとめていった。

資料3・4の児童の記述からは、予想と比べながら学習をふりかえり、自分なりの学習の深まりを自覚していることが読み取れる。また、その中から、新たな疑問や見方をもち始めている。

この学習後、本時ではさらにホシユタカを生産する各農家の作付面積を取り上げた。農家の戸数は、作付面積と同様に著しく伸びていることをグラフで全員で確認した後、一戸当りの作付面積についての資料を提示した。一戸あたりの作付面積をみるとどの農家でも常に約半分をホシユタカとし、残りは白飯用米を生産していることがわかった。この資料から、「農家の人は、売行きのよいホシユタカ栽培に半分しか耕地を充てないのか」という新たな疑問を生んだ。生産者と消費者の立場からその理由を考えることにより、さらに学習を深めることができた。

4. 実践の結果と考察

以上のように、課題に対する予想をもつ場と、学習をふりかえる場を重視してきた。本実践の試みが自己を高める評価力を育成する上で有効であったかどうかについて、児童のノート記述とアンケート結果を基に考察していく。

(1) 課題にする予想をもつ場の重視について

予想をもつ場では、一人一人が課題に対して自分なりの予想をもつことができるように、時間を十分にとった。また、ノートに記述することにより、自分自身がどのように予想したかを明らかにさせるようにした。

また、一人一人の予想を全員で出し合わせ、話し合う場を設定してみた。

資料1のように、一人一人の予想を集団のなかに出し合い、その段階での吟味をおこなうことで、自分自身の予想を、もう一度ふりかえり、新たな予想をもった児童もみられた。また、資料2の児童の予想についての話し合い後の記述（最後の2行）にみられるように、自分の予想に対するこだわりもみられる。

資料3

私は、予想を変更して、だいぶん近くなったと思う。調べてみて、やっぱり、ホシユタカは、ばさついておいしくない米だとわかった。ここまでは、予想どおりだった。

でも、おいしいかおいしくないかは、料理に合っているかどうかだということがわかった。〇〇〇（ファミリーレストランの店名）のピラフはホシユタカかなと思った。

資料4

ぼくは、予想どおりでした。外国の料理を食べに行ったとき、みょうにばらばらした米のサラダを食べたからです。今日の学習で調べながら、なるほど思いました。あのときはお店の人に聞こうとも思わなかったけど、これからは米について「あれっ。」と思うときはすぐに聞いたり、調べたりしようと思いました。

資料5

予想をたてた後、みんなで出し合うとときどきします。私とおなじ人もいれば、全然ちがう人もいます。みんなで話し合っているとしっかりした予想の人と、なんとなくの予想の人にわかれてしまいます。私は、人の考えを聞いていると、すぐに自分の予想がぐらつくので、やっぱり理由のしっかりした予想をたてておかないといけないと思います。

資料6

ぼくは、予想をたてて学習するのは楽しいと思う。もう答えがわかっているときはそうでもないが、この授業のように、今まで知っていることを全部出してもすぐに答えられない予想をたてて、調べるのは楽しい。

このような、予想をたてる学習についてはアンケート調査の結果、全員（36名）が楽しいと答えている。楽しい理由としては「自分の予想を証明しようと思ってやる気がでる」「調べる学習が楽しくなる」が主なものとして挙げられている。また、「予想をしっかりとておくその後でふりかえることができる」と答えている児童もみられた。感想をアンケートの自由記述からみると、前ページ右下の資料5のように、予想を出し合うことで、より「理由のしっかりした予想をたてておく」ことの必要性を実感している児童がみられた。このように、一人一人が予想をち、さらに全員で出し合うことを通して、自分の予想をふりかえり、新たな予想や自分の予想へのこだわりをとに学習を進めていくことは、児童が学習の主体者として、意欲的に学習をすすめていく上で、有効であると思われる。

中には、前ページ右下の資料6の児童のように、答えがわからないときは楽しいが、わかっているときはそうでもないという児童も2名みられた。知識として知っている事項を、自分なりに深めて楽しいと感じる授業づくりまでに至っていないことも、その一因であると考えられる。

(2) 学習をふりかえる場について

学習をふりかえる場としては、予想したことを追求する段階で、自分の学習をふりかえることのできるノート記述をするように助言した。また、予想したことと比べてどうであったかを問いかけることにより、自分自身の変容に気付かせるようにした。資料3は、資料1と同一の児童であるが、自分の変更した予想と比較して、近い点と、気付かなかった点を自分なりにとらえることができているようである。また、資料4のように、自分の予想との比較とともに、これまでの自分をふりかえりながら、今後の自分の調べ方についての記述もみられる。

ノートに書いてふりかえることについては、アンケートの自由記述において、多くの児童がノートに予想や調べたことが残っているとふりかえりやすいと答えている。

右の資料7は、自由記述の1つである。予想とは違っていても、自分のどこが違っていたか、調べ方はどうであったかをふりかえることができたり、友達の調べ方のよさに気付くことがあると感じているようである。

なお、本時の学習内容については、単元の終わりであったために、学習の発展的内容を取り上げた。これは、児童にとっては、一人で調べるにはやや難しい内容であった。資料6の児童は、ほどよい抵抗感のあるものとして、学習の意欲を高めている。しかし、資料8のように、途中で調べることが困難になった児童もみられた。本時では、あらかじめ用意しておいた資料を途中で配布し、その資料も活用して調べる学習を続けさせた。自己を高める評価力の育成を目指した授業づくりにおいて、学習成果をふりかえることのできる学習内容の検討については、今後の課題としたい。

資料7

ノートに書いてふりかえると、自分の予想がちがっているか、あたったかということだけでなく、どうやってしらべたか、どこまで自分の力で調べることができたか、できなかったかということがわかる。くらべて友だちが同じ本から、よくさがしたなと感心することもある。

資料8

きょうの予想は、すぐにできたけど、調べがすごくむずかしかったです。とちゅうまでで止まってしまいました。先生に農協の人の話や、坂井さんの話を渡してもらって、やっと進みました。